

**2014年 第30回写真の町東川賞**

受賞者発表

受賞式及びフォトフェスタ案内

北海道 上川郡 東川町

\*\*\*\*\*

<お問い合わせ先>

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー

写真の町課・写真の町推進室(担当:竹部・窪田)

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

<http://photo-town.jp/>

\* 受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

## 第30回写真の町東川賞受賞作家

<海外作家賞> 対象国:フィンランド

ヨルマ・プラーネン氏 (Jorma Puranen)

受賞理由: 「Icy Prospects」他、一連の作家活動に対して

<国内作家賞>

野口 里佳氏 (のぐち・りか)

受賞理由: 写真展「光は未来に届く」(Izu Photo Museum、2012年)及び一連の作家活動に対して

<新人作家賞>

石塚 元太良氏 (いしづか・げんたろう)

受賞理由: 写真集『Pipeline Iceland/Alaska』(euphoria FACTORY/講談社、2013年)に対して

<特別作家賞>

酒井 広司氏 (さかい・こうじ)

受賞理由: 「偶景」シリーズに至る北海道を撮影した一連の作品に対して

<飛弾野数右衛門賞>

増山 たづ子氏 (ますやま・たづこ) (故人)

受賞理由: ダムに沈む徳山村を撮影した一連の活動に対して

第30回写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

浅葉克己 <あさば・かつみ> アートディレクター

笠原美智子 <かさらは・みちこ> 写真評論家

楠本亜紀 <くすもと・あき> 写真評論家、キュレーター

佐藤時啓 <さとう・ときひろ> 写真家

野町和嘉 <のまち・かずよし> 写真家

平野啓一郎 <ひらの・けいいちろう> 作家

光田由里 <みつだ・ゆり> 美術評論家

山崎 博 <やまざき・ひろし> 写真家

## 第30回写真の町東川賞審査講評

写真の町東川賞も今年はいよいよ30回目という節目の年である。振りかえれば30年という年月には、語り尽くせぬさまざまな出来事があった。社会情勢も30年前と今では大きく様変わりしている。第1回東川国際写真祭が開催されたのは1985年。いまだ展示するためのギャラリーも無く農業改善センターなど既存の施設を使って展示されたことを聞き及ぶ。3代の町長のもと内容も年ごとに見直され新たなアイデアのもとに改善しながら継続されてきた。途中から高校生向けの写真甲子園も併設され昨年20回目を迎えた。ここ数年、全国でも文化による町作りを行う自治体は増えたが、写真の町東川町は30年を迎えた先達として益々盛んである。

今年の審査会は、2月の最終週に行われた。この何年かは審査会委員が固定し8名の委員の個性がお互いに理解され、それぞれの意見の食い違いはあっても議論を尽くして決定していくスタイルが東川賞の特徴として際立ってきている。とはいえ、各賞の最終候補者はいずれ劣らぬ逸材のために、二者択一の論理的な理由を主張することは極めて困難である。多数決で決めざるを得ないのだが、8名という偶数のために、意見が真二つに分かれることは珍しいことでは無い。そしてその組み合わせは毎回違う。しかし、その激戦を選び抜かれた今年の受賞者を見れば、まさに30回を記念する展覧会に相応しいラインナップになったと最後に誇れるのだ。

まずは国内作家賞。野口里佳氏に決定した。野口氏はこれまでもノミネートされてきたが、今年是最終的にはこれまでの一連の作家活動に対しての評価が集まった。野口氏の独特な世界感は柔らかく広がっている。これまでの個展や企画展、原美術館での「飛ぶ夢を見た」、国立新美術館での「光」、IZU PHOTO MUSEUMでの「光は未来に届く」など、少し引いたスタンスで対象を切り取る構図が特徴的だが、いずれも絶妙な物語性を醸し出す。鳥、家畜、昆虫、そして人や太陽の光もロケットの燃焼もプロジェクターの光源も全てが等価で静謐な写真画面を構成する一要因にすぎないと感じさせる。以前に東川で展示をされたことはあったが、今回あらためて受賞されたことは非常に喜ばしい。

続いて新人作家賞。毎年選ぶ側の姿勢が問われるこの賞が一番の激戦になるのだが、今年には石塚元太良氏に贈られる。受賞対象となった「PIPELINE ICELAND/ALASKA」であるが、2007年に最初のパイプラインの写真集が出版されたときにもノミネートされた。前作では4x5で撮影された風景が今回は8x10で撮影されている。たかだか4インチの差だが、そこには大きな取り扱いの違いがある。撮影されたアイスランドやアラスカの自然の風景。そこに同時に写る長いパイプの線。人間はどこに暮らしてもエネルギーを確保する必要性があり、その証左としてのライン。人間と自然のシンプルな関係性があぶり出されている。世界中を大型カメラとともに旅しながらのスケール感と勢いは新人作家賞に相応しい。

特別作家賞は酒井広司氏に決まった。酒井氏もまた長い間ノミネートされ続けてきた一人である。長い間「Sight Seeing」というシリーズによって、北海道の原像を探るような風景写真のシリーズで知られる。現在「偶景」と改名されシリーズは続いているが、今年はここに評価が集まった。酒井氏は北海道に生まれ北海道を対象に長年撮影を続けてこられた。その写真のタイトルには、日付とともに緯度経度と思われる数字が記されている。氏にとってその場所は写真に写る光景の、地理的な場所以上でも以下でも無く、その場所そのものなのである。地勢的に、そして光の採集作業のように撮影を繰り返していく酒井氏の姿勢は、北海道にゆかりのある写真家や写真に与えられる特別賞にまさに相応しいといえる。

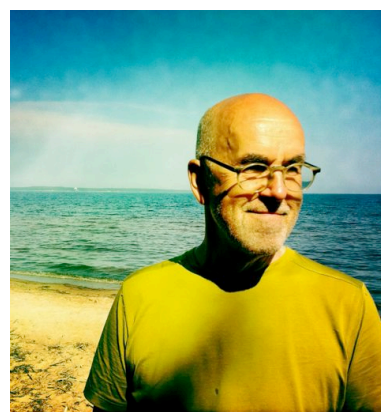
そして飛弾野数衛門賞。今年は増山たづ子氏に贈られることに決まった。増山氏は8年前にすでに他界している。氏は岐阜県徳山村に生まれ、徳山ダムの建設計画から建設にかけてダム下に沈むふるさとを、農業と民宿の経営のかたわら、生涯をかけてコンパクトカメラで記録した。10万カットのネガと600冊に及ぶアルバム。そこに写された写真と、その写真の量を見るものは“写真”という存在についての価値観が揺さぶられる。一人の女性が積み重ねた日常。写真行為とは何なのかという一つの答えがそこにはある。日常の積み重ねの写真が大きな意味や強さを持ちえた。増山氏の業績は飛弾野氏を冠とした賞として顕彰することに最も相応しいとの結論に至った。

最後になるが、本年度の海外作家賞はフィンランドのヨルマ・プラーネン氏に贈られることになった。近年日本でもヘルシンキスクールと呼ばれる写真家達が紹介されはじめたが、ヨルマ・プラーネン氏はヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）で教え、その若い世代の写真家育成に貢献してこられた。氏の作品については、先住民族や様々な言語の写真風景の中に重ね撮影したものや、絵画や写真の表面の反射を撮影したものである。肖像画は歴史や権威を意味するものであり、また言語も文化的な差異を示すものである。写真の効果効用を批判的に見据えた上で用い、引用された絵画や写真が孕む歴史や記憶に関するメタファーとなっている。美しくも深い意味を湛えた氏の作品は海外作家賞として申し分ない。

写真の町東川賞審査会委員 佐藤時啓

第30回写真の町東川賞  
＜海外作家賞＞

ヨルマ・プラーネン氏  
(Jorma Puranen)  
フィンランド・ヘルシンキ在住



1951年フィンランド北部生まれ、ヘルシンキ在住。フィンランドを代表する写真家の一人。ヘルシンキ芸術デザイン大学(現アールト大学)で学んだのち、同大学にて教鞭をとり、ヘルシンキスクールと呼ばれる若い世代の作家の育成に貢献した。

1970年代よりラップランドなどの北極圏とそこに住む少数民族のサーミ人の文化と言語に興味をもち、撮影を行う。パリの人類博物館に収蔵されている1880年代に撮影されたサーミ人の写真アーカイブを再撮し、その写真が撮影された場所に戻すシリーズ「Imaginary Homecoming」(1991-1997)では、ランドスケープの異化を試みるとともに、写真の植民地主義的かつ人類学的視線のあり方を問いかけた。また、美術館が所蔵する歴史的な肖像画を撮影したシリーズ「Shadows, Reflections and All That Sort of Thing」(1997-2004)では、絵画の平面に織りなされる影、反射、絵の具の物質性などを実験的に写し取ることで、肖像画に描かれた視線を際立たせるとともに、絵画／写真、過去／現在、内／外の境界の揺らぎを示している。

光に対する繊細な意識をもちつつ、社会史やコロニアリズム、アプロープリエーション、言語、アーカイブといったテーマに写真を通して向き合いながら、多岐にわたる創作を続けている。

＜作家の言葉＞

私の仕事は、歴史と記憶、地理的想像と文化的な差異が、様々に関連しあった層に表現を与える、写真の持つ力にまつわるものです。写真は、物質として存在すると同時に、複雑にコード化された人と場所の主題的表象であり、思索や幻想、空想を呼び込むものです。歴史と文化的差異というテーマを探究しながら、私は写真のこうした複雑さを利用するばかりでなく、歴史の形成において、視覚的な表象が果たす役割を批判するものとしても用いています。

私がよく自問するのは、「光と影の動きで、これほど表現豊かになる媒体が他にあるだろうか」ということです。私にとって、写真が持つ影と反射をとどめる力は、比類ない特質です。私の作品において反射を利用することは、メタファーであり、現在と過去のつながり、長年にわたる時間の長さや記憶をとらえる手立てなのです。

これらのイメージ故に歴史や記憶、想像力といった観念に焦点が当たることもありますが、実際には、反射、あるいは反射した光こそが、私の作品の写真の主題そのものだといえます。

第30回写真の町東川賞  
＜国内作家賞＞

野口 里佳  
(のぐち・りか)  
ベルリン在住



1971年埼玉県大宮市(現さいたま市)生まれ。1994年日本大学芸術学部写真学科卒業。第5回写真ひとつば展グランプリ受賞(1995年)の「創造の記録」、写真新世紀年間グランプリ受賞(1996年)の「潜る人」、同賞受賞作家展で発表した「フジヤマ」など、独特の距離感と完成度の高い作風で早い時期から注目を浴びる。自身の想像力と被写体が出会う場を求めて、海底や、世界各地、宇宙へと、身体的、精神的な移動と飛躍を重ねるなかで撮影された光景は、幻想的で未知な世界を開示している。近作ではピンホールカメラやシルクスクリーンを使った作品などもてがけ、既成の枠にはとられない写真表現の可能性を問いかける作品を制作している。

1997年には東川町にて、個展「鳥を見る」(ひがしかわアートギャラリー)及びグループ展を開催。1998年、アジア・カルチュラル・カウンシルの個人フェローシップによりニューヨークに滞在。1999年、ライクスアカデミー(アムステルダム)にゲストアーティストとして招聘される。2002年芸術選奨文部科学大臣新人賞(美術部門)受賞。2005年、ポーラ美術財団在外研修員としてドイツ及び東アフリカで研修。現在ベルリン在住。

国内外での展覧会多数。日本における主な個展に、「予感」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2001年)、「飛ぶ夢を見た」(原美術館、2004年)、「光は未来に届く」(Izu Photo Museum、2011/12年)など。

＜作家の言葉＞

このたび東川賞を受賞することになり、とてもうれしく思っています。私は学生時代、20歳のころに写真の魅力と出会い、それから約20年間、写真で作品をつくってきました。私が写真を面白いと思うのは、どんなに頭の中で想像したとしても、それを現実の世界で目にしなければ撮影できないところです。私はいつの間にか、山に登ったり、海に潜ったり、砂漠を歩いたり、あまり得意だとは思えないようなことにも挑戦することになりました。そしてその結果、私の人生はとても豊かなものになっていると思います。写真と出会えた幸運に感謝したいと思います。また今回この賞を頂くきっかけとなった展覧会を一緒につくった、イズ・フォト・ミュージアムのみなさまにも、特にお礼を申し上げたいと思います。最後に私の活動を理解し支えてくれている、私の家族、夫と娘に感謝します。この賞を励みに、これからも写真の可能性を信じ、さらに豊かな作品をつくって行きたいと思います。

第30回写真の町東川賞  
＜新人作家賞＞

石塚 元太良  
(いしづか・げんたろう)  
東京都在住



1977年東京都出身。19歳からスリランカ、ドイツ、アラスカなど約70カ国を旅しながら撮影する。バックパッカーでアフリカ、アジアを縦断しながら撮影した「WorldWideWonderful」で、1999年エプソンカラーイメージングコンテスト大賞。世界を東西から2周し、わずかな時間差でとられた縦位置の写真二枚を見開きに収めた「worldwidewarp」で2002年ヴィジュアルフォトアワード一般部門大賞、日本写真家協会新人賞を受賞。

2003年、アラスカを訪れた際に目にした、広大な自然を延々と突き進む長大なパイプラインに惹きつけられる。オイルショック後、北米最大の油田地帯から南部の港に石油を運ぶために建設が決まった、1280kmもの長さを誇るトランスアラスカパイプライン。そのパイプラインを南北に縦断しながら撮影した写真集『PIPELINE ALASKA』(プチグラパブリッシング)を2007年に出版。以降もアラスカでの撮影を続ける一方、2012年春にはアイスランドのSIMレジデンシーに招聘され、地熱エネルギーを都市へ供給するパイプラインの撮影を8×10の大型カメラで行う。翌13年、アラスカとアイスランドの写真をまとめた写真集『PIPELINE ICELAND/ALASKA』(euphoria FACTORY/講談社)を刊行。

現在、氷河、パイプライン、ゴールドラッシュなどをモチーフに、世界各地で独自の視点からなるランドスケープを撮影している。2011年文化庁在外芸術家派遣員。2012年ポーラ文化財団芸術館派遣員。

＜作家の言葉＞

この度は、栄誉ある賞を頂き、大変光栄に思います。受賞作『PIPELINE ICELAND/ALASKA』は、撮影自体はここ2、3年以内になされたものですが、パイプラインを自然のランドスケープの中で撮影するというアイデア自体を着想してから、10年の月日を要してしまいました。10年それは人生の中ではそれなりに長い時間と言えるでしょう。思い返すのは、アラスカの北極圏での撮影の最後、北極狐が僕の大型カメラでの撮影を見守っていたことです。もしかしたら、あの北極狐に化かされていたのかもしれない。そんな風に、撮影の最後に思いました。こんな極北の地で、パイプラインを10年近くもひたすら追いかけるなんてと。写真はどこか不可思議なものです。そしてそれがたまらない魅力でもある。次はどんなモチーフに取り憑かれ、旅をつづけていこうか。受賞を励みに更なる作品の飛躍が出来ればと思います。ありがとうございました。



第30回写真の町東川賞  
＜特別作家賞＞

酒井 広司  
(さかい・こうじ)  
北海道札幌市在住



1960年北海道余市町生まれ。1980年東京工芸大学短大部写真技術科卒業。同大主催の第一回フォックス・タルボット賞に入賞し、作品「夏の消失点」が写大ギャラリーに収蔵される。札幌市でのスタジオ勤務をへて、1992年グレイトーンフォトグラフィクス有限会社設立。1984年から個展の開催や、グループ展への参加によって、継続的に作品の発表を続けるほか、特定非営利活動法人「北海道を発信する写真家ネットワーク」の会員としても活動している。札幌大谷大学美術学科非常勤講師。

1994年から始めたシリーズ「Sight Seeing」(後に「偶景」と改題)は、北海道ということで思い浮かべられる典型的な景観を排した、アノニマスな風景をとらえたもの。タイトルには撮影した時と場所(北緯東経)を示した21桁の数字が用いられている。北海道の各地で偶々出会った光と場所において、風景が自らを開示する「沈黙の空間」、「風景の原型」を写真に収めようとしている。2009年、CAI02ギャラリー(札幌)にて同シリーズによる個展を開催。

並行して撮影されているシリーズ「そこに立つもの」では、昭和時代に建てられた木造の住宅や、農家の納屋、サイロ、小さな公民館など無名の建築物を撮影。北海道における一時代の記録であるとともに、忘れられたように佇む建築が静謐ながらも強靱な存在感をたたえている。ほかに北海道の各地をカラーでスナップしたシリーズ「北海道の旅」など、北海道の風景をいかに写し取るかということを一貫して追求している。

＜作家の言葉＞

このたびは授賞いただきありがとうございます。東川賞創設30周年の節目に重ねてうれしく思っております。賞に推薦いただいた方々、いままで私の写真を見ていただいたすべての方々に感謝いたします。また、北海道に生まれた者として特別作家賞をいただくことは光栄の限りです。

私は1970年代から北海道を撮影対象に写真を制作してきました。中学生時代、叔父にもらったカメラで身の周りを写すのから始まり、当時住んでいた倶知安や室蘭、生地である余市や小樽の街を撮影してきました。現在は札幌にいますが、振り返るに道内で自分の足許ばかり写してきました。

「偶景」は「Sight Seeing」として1994年以来撮影を続けているシリーズを最近、改題したものです。道内を巡って辿り着いたその場所もやはりどこかで自分に繋がっているような気がします。とはいえ自分の思いとは無縁にその場所はその場所のまま、写真に表れればよいとも思っています。

第30回写真の町東川賞  
＜飛弾野数右衛門賞＞

増山 たづ子

(ますやま・たづこ)

岐阜県徳山村出身 (1917-2006)



撮影:垣内博

1917年、岐阜県徳山村（現・揖斐川町）戸入生まれ。戦争で夫を亡くした後、農業のかたわら民宿を営みながら徳山村にて暮らす。1957年、徳山ダム計画が立ち上がり、村の記録を残したい気持ちから、テープレコーダーにて村の行事や生活音の録音をはじめ。ダム計画が本格化するなか、1977年村民運動会で写真を撮影して以降、ピッカリコニカでの撮影に年金をつぎ込み「カメラばあちゃん」の愛称で親しまれる。

1983年、徳山村を舞台にした映画「ふるさと」（監督：神山征二郎）に協力し、最後の場面にも出演。最初の写真集『故郷—私の徳山村写真日記』（じゃこめてい出版、1983年）を出版。1985年離村を余儀なくされ、岐阜市内に転居。1987年の廃村後も村に通い、2006年3月に88歳で亡くなるまで、故郷の人々、自然、建物、祭り、風習などを撮り続けた。その数は約10万カットのネガと600冊のアルバムにのぼる。同9月、徳山ダムの試験湛水が始まり、旧徳山村跡地が水没。2008年、計画から半世紀を経て徳山ダムは完成し、増山の写真は村の姿をとどめるかけがえのない記録となった。

1984年、エイボン功績賞を受賞。写真集に『ありがとう徳山村』（影書房、1987年）『増山たづ子 徳山村写真全記録』（影書房、1997年）など。没後も日本各地で写真展が開催され、近年では「増山たづ子 すべて写真になる日まで」（Izu Photo Museum, 2013/14年）がある。

＜作家の言葉＞

増山たづ子のふるさと、岐阜県揖斐郡旧徳山村に貯水量日本一のダム建設が決定したのは昭和52年でした。増山はふるさとが「みなしまい」となる事実を受け入れ、自分にできることは何だろうと自身に問いかけました。そこでの結論は「消えてしまう豊かな自然と歴史と文化のすべてを写真で残す事」と、以降精力的に撮り続けました。その数10万枚、アルバムにして600冊にもなりました。増山の写真には観る人の心に強い感動と共感を呼び起こすものがあります。「ふるさとがあっただけでもありがたい」「ご先祖様申し訳ありません」と感謝と詫びの念を抱きながらシャッターを切っていました。

3年前に発生した東日本大震災を契機に“ふるさと”、“絆”の想いが人々の心に深く染み入るようになって来ています。このような折に増山の残した写真は観てくださる方に一層の感動の念を抱いていただけているのでしょうか。

没後8年となる今年(2014)、多くの方のお力添えにより賞をいただくことができました。ありがとうございました。

(増山たづ子の遺志を継ぐ館 野部博子)

## 第30回東川町国際写真フェスティバル

### ～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2014～

#### <受賞作家作品展>

会期：8月9日（土）～9月3日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：30（8月9日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（8月9日、10日は無料開放）

海外作家賞・・・ヨルマ・プラーネン（Jorma Puranen）

国内作家賞・・・野口里佳

新人作家賞・・・石塚元太良

特別作家賞・・・酒井広司

飛弾野数右衛門賞・・・増山たづ子

#### ●8月9日（土）

14：00～14：45 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット

15：30～17：00 レセプション（受賞を祝う集い）

#### ●8月10日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査員、ゲスト

## ■■■ 写真の町とは ■■■

1984年、東川町に開墾の跡がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育てていくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル(愛称:東川町フォトフェスタ)」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートフォトギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真による自然観察講座、町民や初心者を対象とした写真教室、町民写真展など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

そして、2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

## ■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■

### ●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品(作家)に対し、昭和60年(1985年)を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

### ●賞

写真の町東川賞<海外作家賞>	1名	賞金100万円
写真の町東川賞<国内作家賞>	1名	賞金100万円
写真の町東川賞<新人作家賞>	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞<特別作家賞>	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞<飛弾野数右衛門賞>	1名	賞金 50万円

\*2010年の改定により賞金が増額され、新たに飛弾野数衛門賞が創設されました。

### ●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

### ●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する[写真の町東川賞審査会]において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

### ●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、[写真の町・東川町文化ギャラリー]に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。